

4-4				
主題	デイサービスが考える地域密着型サービスとしての取組みと利用者の活動			
副題	有する能力を大切に			
キーワード 1	地域密着型	キーワード 2	有する能力	研究(実践)期間 36ヶ月
法人名・事業所名	社福) 芙蓉会 デイサービスセンター芙蓉園			
発表者(職種)	石井正(管理者)			
共同研究(実践)者	なし			
電話	042-850-5469	FAX	042-850-6093	
事業所紹介	利用者が今まで歩んできた貴重な経験や技術を活かしながら心身機能の維持・向上を目指すデイサービスです。農作業や竹細工作り、街の清掃活動、近隣小学校や保育園との関わりなどあらゆる活動を創造しています。そして日々の社会参加を通じて住み慣れた自宅や街が居心地のよい場所となれるお手伝いをしています。			
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>2015年12月に開設した小規模型デイサービスつま屋は、参加者が行ったことがないところ、行ってみたいところへ出掛け、ある参加者(つま屋では社会参加をする意味で利用者を参加者と呼んでいる。)は当初、車椅子で移動していたが半年後には一点杖を使用し、2年後には100m歩くことができるまで下肢筋力が向上し、自宅の上がりかまちを一人で行き来するまでになり、デイサービスとしての目的や効果は表れていた。しかし下肢筋力向上支援による外での活動がほとんどであった為「連絡をしてもなかなか繋がらない」「なにをしているかわからないところ」とケアマネジャーや地域の方から言われるようになり、結果的に稼働率も伸び悩んでしまっていた。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>そんななか2017年4月から地域密着型デイサービスに変わった契機に「なにをしているかわからないところ」から払拭し「地域と繋がるデイサービス」を目指すこととした。参加者が住み慣れた自宅で暮らしを続けていく在宅支援サービスとして、下肢筋力維持向上は不可欠である。さらに地域密着型サービスの意味もスタッフ間で話し合いを重ねた結果</p> <p>(1) 下肢筋力維持向上の外出支援は継続 (2) 参加者の有する能力を大切にサービス (3) 参加者が地域の方々との関わりを持つことができる場所 (4) 地域の方々が気軽に立ち寄ることができる場所</p> <p>この4点を柱に事業を改めることで「なにをしているかわからないところ」を払拭し、地域密着型サービスとして「地域と繋がるデイサービス」として、今までのデイサービスに対する否定的なイメージをもたれる利用予定者への、利用の選択肢の一つのきっかけとなり、結果的に稼働率も向上できるのではないかと考えた。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>1) 参加者が住み慣れた自宅で暮らしを続けていく在宅支援サービスとして、下肢筋力維持向上は不可欠である。下肢筋力維持向上のための外出は午前か午後どちらかとする。 2) 認知症状態にある方、様々な疾患をおもちでいても、住み慣れた地域で暮らし続けることができるこ</p>				

とを地域の方々に知ってもらえる活動をおこなう。

3)「だれかの役にたちたい」思いを実現できる活動をおこなう。

4) 地域の一拠点として、近隣にある社会資源との関わりを深める活動をおこなう。

5) 地域に住まうさまざまな方と繋がりを作り、ボランティア活動や気軽に立ち寄れる場所作りをおこなう。

6) 稼働率達成のために居宅介護支援事業所へ参加者自らの声で営業活動や SNS へ活動内容を定期的に投稿し、周知をはかる。

《4. 取り組みの結果》

①開設当初からおこなってきた小学校下校時の旗振り活動をほぼ毎日継続しておこなうこと、参加者が子供の頃作っていた竹とんぼを子ども達にプレゼントをするようになり、つるま屋に集まるようになり、その様子を大人や地域の方が見ていて関係性が広がり、バザーや夏祭り出店のお誘い、地域行事に招待をいただくことができた。

②認知症状態や様々な疾患を抱えておられてもできることは沢山あると知ってもらえることに繋がることのできた

③地域に住む知的障がいを持つ女性が間接業務のボランティアをすることができ、働くことに自信を持ち、就労支援事業 B 型に契約することができた。

④地域と繋がる活動は「参加者のやってみたいこと」「誰かの役にたちたい思いを実現する」ためにおこなってきたが、参加者の表情が益々豊かになっていくことでスタッフもやりがいに繋がり、日頃の会話から活動に結び付けられるようになり、参加者へのアセスメント力が向上した。

⑤広報活動を通してケアマネジャーからだけではなくご家族や利用予定者自らが買い物帰りに見学をし、利用に繋がったこともあり、年間稼働率57.3%から73.4%に向上することができた。

《5. 考察、まとめ》

・地域と繋がる活動は幅広く、また参加者の「誰かの役にたちたい思い」を大切にしながら、日々変化する身体状況、精神状態を把握し活動を行っていくことはとても難しく、毎日の振り返りや事例検討会を繰り返しながら、スタッフ間で日々価値観をすり合わせていくことが必要なので、スタッフの疲労度は増している。参加者と同じようにスタッフも大切にしていける環境作りの課題を表出することができた。

・参加者にとって活動を「やらされている」とならないよう関係性の構築を大切に、コミュニケーションの重要性を認識し、活動を開始する前に「自ら活動に参加する」確認をとってからおこなうこととした。

・沢山の地域の方が来訪されるようになるとスタッフが地域の方を優先し、参加者を後回しにしてしまうことが続いた。所在不明や転倒事故の事案もみられるようになった。

・地域との繋がりが結果的に参加者の活動の幅を広げ、自己実現に繋がることができたが、参加者に繋がる下地として活動時間外や時間内に地域との会合や準備に追われ、スタッフの希望休が思うように取得できなくなる弊害を生んでしまった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(関係者)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「日本でいちばん大切にしたい会社」1～6(2008～2018) 坂本光司 あさ出版

「大人の道徳 - 西洋近代思想を問い直す - 」(2018) 駒橋憲一 東洋経済新報社

「鼻めがねという暴力 - どうすれば認知症の人への虐待を止められるか - 」(2016) 林田敏弘 harunosora

《8. 提案と発信》

認知症状態や様々な疾患や障がいがあっても、健常者であっても、住み慣れた地域で暮らし続けたい思いは誰も同じではないでしょうか。もともと地域に住んでおられる方達は「ごちゃませ」という言葉ではなく、助け合いながら暮らしています。地域の一員であるつるま屋は、住み慣れた地域で、あたりまえの暮らしが続けられるお手伝いをしています。